

未来ソーシャル生活シミュレーション

2013年9月、鈴木恵子は、都内の大学に通う英文学科の学生だ。新しいものの好きな女性である。先日ダウンロードしたアプリをONにして東京の街を歩くの楽しみにしている。そのアプリは、“もう1つのセカイ”という名前だ。街を歩いているとバーチャル世界（もう1つのセカイ）から話しかけられるという、なんともはや奇想天外なアプリである。

今日は面白そうなイベントが渋谷で開催されるので、午後からの授業をサボって渋谷のマークシティ前あたりを歩いていると、早速私の携帯電話が鳴った。バーチャル世界から誰かが話しかけてきている。携帯電話には、相手方の話した言葉が表示されている。

My name is Bob. I am a 20 year-old Englishman. I am planning to go on a trip to Tokyo soon. I am interested in the town of Shibuya. Please tell me about a recent Shibuya.

まあ、イギリス人からだわ。東京旅行の下見みたいね。私もイギリスに行ってみたいので、コンタクトをつけておくのも悪くはないわね。

そう思って私は、渋谷の現状をいろいろと教えてあげた。

このアプリ“もう1つのセカイ”のからくりはこうだ。

まず、例えばストリートビューやmeet-meのように現実世界（リアル世界）をコピーしてデジタル映像化したバーチャル世界（メタバース）を用意する。次に、携帯電話のGPS機能を利用して、リアル世界にいる人のアバターをバーチャル世界の対応する位置に映像表示する。例えば、私が渋谷の街を歩いている最中、私のアバターがバーチャル世界内の渋谷を同じように歩く。バーチャル世界に進入した他人がそのアバターを見つけて話しかければ、その話し言葉がリアル世界の私の携帯電話に表示される。もちろん直接通話も可能だ。

バーチャル世界のよいところは、どこにでも瞬間移動できる点である。先ほど

のイギリス人ボブは、イギリスにいながらにしてバーチャル世界に進入して渋谷に瞬間移動して来たのだろう。そして、ちょうど渋谷を歩いていた私のアバターに話しかけてきたというわけだ。このアプリ“もう1つのセカイ”のおかげで、最近バーチャル世界（メタバース）がずいぶんとにぎやかになった。以前のバーチャル世界は他人のアバターにほとんど出会うことがなくいつも閑散としていたが、今ではリアル世界を歩いている多くの人間のアバターでにぎわっている。

私は、後々連絡が付くように“共有仮想タグ”を現在位置に貼り付けることを相手（ボブ）に提案した。この“共有仮想タグ”こそ“もう1つのセカイ”の最大の売りと思う。なにしろ、電話番号やメールアドレスや住所などの個人情報は一切相手に伝えることなく、後々コンタクトを取ることができるという、優れものだ。初対面で氏素性の分からない相手の場合、特に重宝する。あ！ そうかボブとはまだ実際には会っていないので、初対面未満だね。

この“共有仮想タグ”は、“もう1つのセカイ”のサービスプロバイダに当事者（ボブと私）が共有仮想タグの生成を依頼することにより、その当事者の現在の場所（リアル世界とバーチャル世界との両方）に生成されて貼り付けられる。生成された“共有仮想タグ”は、当事者の携帯電話にしか表示されず、当事者のみがその“共有仮想タグ”にアクセスできる。バーチャル世界に進入して自分が生成した“共有仮想タグ”をクリックすれば、コンタクト用ページが開かれ、互いに書き込みや閲覧ができる。気が向かない相手の場合には、その“共有仮想タグ”にアクセスしなければよいのである。共有仮想タグを生成した当事者以外の者によって共有仮想タグをクリックされた場合は、サーバ側でアクセスを阻止し、コンタクト用ページは開かれない。

もちろん、リアル世界同士の人が出会った場合にも同様に、出会った場所（リアル世界とバーチャル世界との両方）に“共有仮想タグ”を生成することもできる。

後々コンタクトを取る相手特定するにおいて相手の名前などを知らなくても、“共有仮想タグ”が出会った場所に生成されているために、その“共有仮想タグ”が生成されている場所が相手特定する情報となる。バーチャル空間から“共有仮想タグ”が生成されている場所に行けば、出会ったときの記憶が蘇り、相手の名前などを知らなくてもコンタクトを取りたい相手か否か、判断が付く。

このように“共有仮想タグ”が拘束力のないゆるいつながりを構築するものであるために、“共有仮想タグ”を生成する際の精神的障壁が少なく、最近ではだれもが気軽に“共有仮想タグ”を生成する風潮になった。ビジネス上で初対面の相手と名刺交換するのと同様に、プライベート上では初対面の相手と共有仮想タグを生成する。初対面の相手に対する一種の礼儀のようなもの、とも言えそうだが。昔の男は、彼女の電話番号やメールアドレスを聞きだすのにそれ相当の勇気が必要だったようだが、このようなことは“共有仮想タグ”のおかげで懐かしい昔話しになってしまった。

ボブとの会話も終わり、携帯電話をしまおうと鞆をあけたところ、あれ？ 教科書が1つ無い！ 大学の教室に忘れてきてしまったんだわ。今から取りに帰ったのでは、渋谷でのイベントに間に合わない。どうしよう。

そうだ、こんなときにこそ“もう1つのセカイ”を利用すればいいんだわ。私は早速バーチャル世界に進入して大学の教室に瞬間移動した。だれか知り合いがいればいいんだけど・・・バーチャル空間の教室内を見渡してみると、数人のアバターがいる。あれ？ あのアバター確か文美じゃないの。ラッキー！ 私は文美のアバターに話しかけ、教室に忘れていた教科書を預かってもらうことにした。文美サンキュー。

そういえば、以前のハイチ地震のときにもこの“もう1つのセカイ”が大活躍したと、ニュースで報道していたわね。地震直後に救援隊の1人が先ずバーチャル世界から進入して被災地に瞬間移動し、その場所で表示されていたアバターに話しかけ、現地の被災状況をいち早くキャッチし、また適切なアドバイスを現地

被災者に直接伝えた、ということだ。

そうだ、ゆっくりしている場合じゃない、さあ、イベント会場に急ぎましょう。

渋谷区道玄坂のイベント会場に着いた。“イギリス留学準備セミナー”私これに出席したかったんだ。会場には、イギリスに留学したいという同志が既に100人近く集まっていた。受付で資料をもらったとき、受付係りの人から、「共有仮想タグによるコミュニティーに入会しませんか？」と誘われた。私は喜んで入会した。

以前のイベントでは、受付で住所氏名やメールアドレス等の個人情報を記入させられて、後々イベント主催者側からダイレクトメール等がしつこく送られてきたが、最近では、イベント主催者側と参加者側との情報のやり取りは、自由参加のコミュニティーで行なうようになった。ボブと作成した共有仮想タグは個人同士のコンタクト手段だが、それをイベント主催者側と各参加者同士のコンタクト手段に広げたのが、この“共有仮想タグによるコミュニティー”だ。自分の携帯電話を操作して受付の無線LANアクセスポイントと交信するだけで、簡単に“共有仮想タグによるコミュニティー”に入会できる。

入会した後、私は早速バーチャル世界の渋谷区道玄坂のイベント会場に進入してみた。既にそこにはコミュニティー用共有仮想タグが生成されており、クリックしてみた。すると、イベント主催者側の作成したホームページが開き、参加者への連絡コーナーとか参加者によるコミュニティーコーナー等が作成されている。コミュニティーコーナーには既に数件の書込みがなされていた。まずは自己紹介と思い、私も書き込んだ。今後は、このコミュニティーを通じて同じ志を持った者同士による有意義な情報交換ができそう。人同士の新しい繋がりができたらいいな。なにかワクワクしてきたわ。プライバシーの心配もなく“共有仮想タグ” 様様ね。

イベントも終わり帰宅する途中に、私の携帯電話が鳴った。コンタクトページに書込みがあったことのポップアップ通知だわ。どこの共有仮想タグだろう？
あら、先ほど渋谷のマークシティ前で生成した共有仮想タグだわ。たしかボブと名乗ってたわね。忘れないうちにメモしておこうと思い、携帯電話の共有仮想タグ帳を開いた。

最近の携帯電話では、アドレス帳の他に共有仮想タグ帳が表示される。今までに生成した共有仮想タグの生成場所と生成日時とメモ書きとが表示され、私は先ほどの渋谷のマークシティ前で生成した共有仮想タグのメモ欄に、「イギリス人のボブ。近じか東京にくるかも。渋谷に興味を持っている。」と書き込んだ。このリスト表示された多数の共有仮想タグの中からアクセスしたい共有仮想タグを選んでクリックすることにより、その共有仮想タグが生成されているバーチャル空間にジャンプできる。今や、この“共有仮想タグ帳”は、アドレス帳に次ぐ第2の繋がりデータベースの地位を築いたようだ。

渋谷マークシティ前の共有仮想タグをクリックしてコンタクトページを開いてみると、ボブからの書込みがなされている。書き込み内容は、秋葉原で発生した通り魔殺傷事件に関することだった。へー イギリスでも有名な事件になってたんだ。しかし、ボブって、“もう1つのセカイ”のタイムマシン機能を知らないのかしら？

あれは確か5年ほど前の事件だったわね。検索してみたところ、事件発生日時が2008年6月8日となっている。早速バーチャル世界に進入して、2008年6月8日の秋葉原にタイムスリップしてみた。そう、“もう1つのセカイ”は、場所だけでなく過去の時間にも瞬間移動できるというタイムマシン機能を有している。いわば、四次元的広がりを持つ時空間なのだ。

2008年6月8日の秋葉原バーチャル空間には、たくさんの仮想タグ（エアタグ）が貼り付けられていた。それらをクリックすると、当時の生々しい状況や撮影映像を閲覧することができる。また、その仮想タグを作成した本人と仮想タ

グを介して情報交換が可能となる。私は、2008年6月8日の秋葉原バーチャル空間にアクセスすれば、事件発生当時の生々しい情報を得ることができる旨、コンタクトページに書き込み、ボブに教えた。

このように時間軸をも利用したタイムマシンのようなアクセスを可能にした“もう1つのセカイ”に長年にわたって仮想タグを蓄積することにより、バーチャル時空間を巨大な歴史データベースに成長させることができる。しかも、この歴史データベースへのデータの蓄積は、膨大な数のユーザ自身が自ら率先して行ってくれるため、コストをかけることなく巨大歴史データベースを構築できる。最近ではこの巨大歴史データを有効活用しようと、各種企業が乗り出してきた。この巨大歴史データを整理して、より便利に活用できるようにしようとしている。しかしまあ、なんともはやスケールの大きな話だこと。